

あの戦争、あの時代

谷野 作太郎

今年も、八月十五日をまたぐ形で、あの戦争、あの時代をめぐって、いろいろな企画が組まれた。

そのひとつは、岩波ホールにおける「嗚呼、満蒙開拓団」の上映である。方正友好交流の会の活動、方正所在の日本人公墓のことは、交流の会・事務局長の大類さんから直接うかがったり、その後、資料をいただいたりして承知していたが、映像を通してとはいえ、その日本人公墓を目のあたりにするのはこれがはじめてであり、何とも感無量だった。映画を見終わって、あらためて「何と馬鹿な戦争をしたものよ」という、やり場のない無念さと——これが当日ホールを埋めつくした多くの人たちの共通した思いであったことは、この人たちがホールをあとにする様子から見てとれた——あの戦争、無謀な国策の犠牲になられた人々に対し、その後、私たちの日本（官民）がなして来たことの少なきことへの悔恨の念がこみ上げてくるのを抑えられなかった。

その後、NHKがあの当時、日本海軍の中枢にあった方々が、戦後、綿々と語る反省、悔恨の弁、(録画の時期は、かなり以前らしいが)を放映したが、これを見ると、あの戦争をめぐってその後巷間伝えられた「陸軍悪玉、海軍善玉」説は、そんな単純な話ではないことが、良く分かった。それにしても、この座談会が最後、参加された方々の高笑で終わったことが気になった。

過日はまた、防衛省防衛研究所が主催した「戦争史研究国際フォーラム」を終日傍聴する機会があった。同研究会の幹部の人たちを中心に、日本の戦史の研究者と欧米の学者たちを集めての、なかなか良質のフォーラムであったが、ここでも、出席したパネリストたちが、くり返し口にしたことは、「日本は何故(勝てもしないと分かっていた)あの戦争につっ込んでいったのか」ということであった。かつて、当時、陸軍参謀の中枢にあった人が、「わしらは、対米戦争については、清水の舞台から飛び降りるような気分でやった！」と語るのを耳にしたことがある。

ところで、ここにあれば、「自存自衛のための戦争」だったという主張がある。アメリカに負けると分かっていたものの、そのアメリカに石油を絶たれ、その結果、日本は立ち上がらざるを得なかったのだ、と。しかし、ここですっぱり抜けているのは、日本がそこまで追いつめられた、そこに至るまでの経緯、すなわち、日本の中国大陸への軍事侵略の歴史である。この正義なき無謀な戦争が、日本を国際的孤立に追い込み、どこかに突破口を見出さんとして、「仏印進駐」の挙に出た結果、遂には、米国などによる資産凍結、対日石油輸出の禁止、日米通商条約破棄へと追い込まれるのである。

あの「村山談話」に、「わが国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り、戦争の道を歩ん

で・・・」とあるのは、ひとつには、あの頃、すなわち、真珠湾攻撃に至る対中国関係という前段の歴史をこそ念頭においてのことであろう。故橋本龍太郎氏（村山内閣で副総理、当時は日本遺族会の会長でもあった）は、生前私に、あの時代の話がされながら、「日本は中国との関係では、あの対華21ヶ条要求（1915年）あたりから誤った道に入り込み、きわめつきは満州事変（1931年）だった。」と述べておられたことを思い出す。「村山談話」についても、原案では「敗戦」、「終戦」と書き分けてあったのを、村山総理からの相談を受けて、すべて「敗戦」という表現にそろえては如何、とサジェストされ、「遺族会の方はそれで、何ら問題ありません」とおっしゃっていたという話は、今では、多くの人々が知るところである。ちなみに、この「村山談話」は、日本を「侵略国」と決めつけたものであり、怪しからぬとの論があるが、これも同談話を落ち着いて読めば、これまた一方的なものの言い方であるということが分かるであろう。「談話」は「過去の一時期、日本は国を誤ったことがある」と述べているに過ぎないのだから。

また、あの戦争は、「アジア解放のための聖戦だった」という主張もある。たしかに、前線では、そのように信じ、勇敢に戦い、命を落としていった兵士たちも少なくなかったであろう。紙面の制約で、ここで詳述する余裕はないが、これも手前勝手な見方であるということは、当時の軍の中枢の人たちが公式文書として書き残したもの（本音）に目を通せば明らかである。（“アジア解放のため”というのであれば、豊富な石油資源を手放したくないという理由で、インドネシアには最後まで独立を認めなかった——これに抗して独立を勝ち取ったのはあのスカルノだった——という事実をどう説明するのだろう）

あの時代の不幸な歴史について、「謝罪」はもうよい。これについては、これまで日本政府は総理大臣以下折りに触れてこれを表明して来た。それにこれは、今では中国をはじめアジアの国々（政府）が日本に求めるところでもないし、日本としても、これを続けることは民族の誇りをそぎ取ることにもなりかねない。問題は、そのことではなく、「歴史」の歪曲、「歴史」への開き直りである。そうすることが、如何にアジアをはじめ世界の国々が、私たち日本（人）を見る目線を下げることになるが、そうして、とくに、日本の要路にある人たちがそうすることは実は、私たち日本人の誇りを最も深いところで傷つける結果となるということを知って欲しいと思う。要は、そのような「過去」を勇気をもって見詰め、しっかりこれと対峙しつつ、そこからより確かな未来構築に向けての教訓をくみとってゆくということこそ私たちのとるべき道だと思う。

この度、方正県の日本人公墓に対する日本政府（外務省）の支援も決まったという。うれしいニュースとして受けとめた。

——方正友好交流の会の一層のご発展をお祈りして。

（たにの・さくたろう：インド大使、中国大使を歴任。中国大使時代は、率直に中国政府に対しても問題を提起する一方、台頭するインド、中国に対して日本がどう向き合うべきか、と常に友好推進の立場から発言。現在、（財）日中友好会会館 会長代行）